

ヨシの髓から覗いたソ連（下）

―シベリア捕虜回想記―

宮川 政治

二二、政治部員・密告・戦犯探索

広大な国土と当時、人口一億二千万余のソ連は、一党独裁で共産党の支配下にあった。国家権力体系は、党の中央委員会（書記長スターリン）を頂点として、末端には全国の要所に政治部員（共産党員）が配置されていた。

この政治部員は、大変な権力を持っていたようである。我々の収容所にも政治部員の中尉が来たことがあるが、収容所の一般の大尉や中尉はビクビクして、非常に恐れている風に見えた。彼等の一番の恐怖は、仲間同士の告発や密告によって直ちに取調べを受け、左遷されることであつた。我々の仲間からの元憲兵とか、特務機関とか、或いは関東軍防疫給水部（七三一部隊）等の戦犯容疑者の探索にも、日本人からの密告をフルに利用していた。勿論、民主グループは、ソ連政治部員の手先となつて密告していたようである。

私は、入ソ似来、前述したようにチタ市北方の伐採収容所を皮切りに、チタ附近の収容所を四カ所（約二年）、次に奥シベリアのブカチャチャという炭坑収容所（約半年）、更にハバロフスクに送られてから約二年間に、実に二十二カ所の収容所を盪回しにされた。

これは、関東軍軍医部員の時、管下部隊の防疫と診療関係の担当であつたので、関東軍防疫給水部の指導に関係していたかどうかが調査の対象となり、長い抑留と盪回しになったものと思われる。そのため、何回か個室に呼ばれ、通訳つきで厳しい尋問を受けなければならなかつた。

二二、御賜の時計は今いずこ

軍医学校卒業時の御賜の時計は、精工舎の純銀製梨地の懐中時計で、裏に御賜と彫られていた。入ソ以来数十回に及ぶソ連人の身体検査と略奪を免れて、それまで何とか隠し持っていた。しかし、ハバロフスクに送られてから所謂民主化運動の激烈化に伴い、日本人同士が密告しあい、特に、「将校は天皇の股肱で最も悪い奴である」という立場から、アクチーブ達が目をつけて私物検査を始めるようになった。また、比較的親しくしていた仲間の連中でも、いつ密告者に回るか分らない状況になつてきた。それは、ダモイ（帰国）の気配が近付くと、相手を蹴落としても自分が良い子になりたいという、誠に浅ましい人間集団と化してしまつたのである。

もし私が御賜の時計を持っていることが見つければ、反動、戦犯として必ず陥れられるに違ひなかつた。そこで止むを得ず、その収容所で最も人間的であつたソ連の軍医ミハイロフ中尉に、御賜の二字を出来るだけ擦り消して、時計を密かにプレゼントしたのであつた。

その後、約一年近く経た別の収容所で、私が栄養失調と痔で重症になつた時に、月例検査で見つけてくれ、直ちに入院させ、助けてくれたのが、確かその収容所に丁度転勤になつて来たミハイロフ中尉であつたのであるが、これは偶然では無く、強い因縁であると今でも確信している。

あのミハイロフ中尉は、今どこにいたのであろうか。もし、彼に会うことが出来たならば、人の良い彼のことだから、きつと返してくれるかも知れないし、またシベリア捕虜当時の積る想い出話を四方山としてみたいものである。

二三、プライドだけでは勝てない飢餓

ハバロフスクの収容所では将校作業隊に入れられ、元連隊長や元参謀の大佐や中佐

等と共に、レールや煉瓦の運搬、あるいは馬鈴薯の貨車積み下みし等の重労働に従った。身長一七八センチで基礎代謝の大きい私は、一定少量の食物では、作業量が増えたと急速に栄養失調となり、二、三度入院した。当時として入院は、悪い病気でない限り、仕事をしなくてもよいし、また共産主義の猛烈な学習もなく、悪いことではなかった。

そのうちの一回は、栄養失調に内外痔核と脱肛を併発し、手術を受けた。手術時は意識不鮮明だったので記憶が明らかでないが、ヒマシ油を吞まされて絶食後、肛門鏡で肛門を抜げて数個の痔核を局麻で根元を強く結紮し、二日位してから外に出しておいた糸を強く引つ張って、壊死した痔核をもぎ取るようであった。そのあと沃丁をつけられた綿俵で、肛門の内側をグルリと撫でたが、その時の痛かったことといったらなかった。

術後の回復期を経て、軽作業が出来る状態になると、夜間作業に馬鈴薯の皮むきを志願した。これは共産主義の学習や討論からのエスケープもあつたが、作業が終わつた後の一杯のスープの支給が目当てであつた。将官はいなかつたが、旧軍隊のときは一応威厳のあつたような佐官達が、私も含めて哀れな姿で一杯のスープを夢中で啜る姿は、何とも情け無い情景であつたようである。

慢性飢餓がいかに苦痛なものであるかは、今の若い人達にはとても想像出来ないであろう。二大本能と言われるが、種族保存のための性欲は、身体が衰えてくるにつれて殆ど無くなるが、一方、個体の生命維持のための食欲本能は大変なものである。慢性飢餓で重労働を強いられ、ジリジリと衰弱して行く状態が先の見通しも無く続くことは、体験者のみを知る人間最大の苦しみである。だからこそ食べられる物は何でも食べようとするし、食べたい食べたいという執念は、餓鬼道の責苦であつた。

今から千五百年程前の中国の有名な詩人

陶淵明は、貧窮と飢餓のため餓死線上をさま迷い、次の詩を残している。

「飢え来たりて我を駆り出せしも／知らず、ついにいづくに行くかを／めぐりめぐりてこの里に至り／門を叩きて言辞拙なり／主人は余が意をさと／恵みあり、あに無駄にきたらんや」

当時、中国の高潔の士は人に食物を乞うことを恥としていた。淵明も清廉高潔を生活信条としていたが、しかし、「いかなる恥辱をしのんでも、無駄な餓死からだけは免れたい」という意が、この詩にこめられているのであろう。

二四、ソ連の最終地ナホトカ

昭和二十五年一月十五日頃のことであつた。ハバロフスク市内の第十六分所にいた我々に、「ダモイ」の命令が届いた。一瞬間喚声があがり、次には皆呆然として、嘘ではないかと耳を疑った。明朝出発で、シベリア鉄道で南下してナホトカに集結ということであつた。

嘘ではなく翌朝出発したのであるが、例のアクチーブの奴等の脅かしと、嫌がらせが大変であつた。要するに「反動や帝国主義者達は、ナホトカに着いても送り返される」「これからが本性を表わすのだから、看視を怠るな」「我等が祖国ソ同盟を強化するため、天皇島へ敵前上陸するのだ」等々であつた。事実、彼等の政治部員への密告により、ナホトカから送り返された人も何名かいたようである。我々は半信半疑で、息を潜めていた。

列車の進行は遅く、三日位でナホトカに着いた。驚いたことに、ナホトカにも四カ所位の収容所があり、先着の部隊で一杯であつた。聞くと、二つの作業隊が三十キロ位離れた所で作業をしているとか、またここで反動を選別し、反動はその作業隊へ送られるのだ、ということであつた。皆慄然として、一生懸命に「ソ同盟や共産主義の賛美」を唱えたのであつた。適当にガワリ

ガワリしていないと、いつ「吊し上げ」を受けるかわからないのである。

それでも、七日位経つと何とか順番が来て、高砂丸に乗船することになった。

二五、帰還船、高砂丸

昭和二十五年一月二十四日は朝から浜辺に出て、何年も見なかった海を飽かず眺めた。涙が溢れて来た。沖合の船には船腹に高砂丸と書かれ、マストには日の丸の旗が翻っているではないか。そうして、何とか間違い無くあの船に乗りたものだ、胸が締めつけられる思いであった。一人一人名前が読み上げられ、ドキドキしながら聞いていた。自分の名が出て来た時は感無量であった。

舢舨に乗って、沖合の船のタラップを上っても、再び呼び戻されるのではないかと気が気で無く、安心出来なかった自分自身をよく覚えていいる。割り当てられた船室に入り、夕方近くなって船は出港した。夕食は紙皿に盛られた白米のカレーライスに福神漬、玉子焼き等で、その美味しかったことは、今でも忘れない。

船内を往来する船員は皆日本人であり、放送される言葉も日本語で、なんと優しい同情に満ちた話し方であろうかと思つた。船が動き出したとはいえ、それでも私は、第一夜は安心することが出来なかつた。いつかソ連から呼び戻しの快速艇が来るのではないかと、脅迫観念の虜になっていたようである。

翌二日目の朝になり、船は感覺的にも日本海の中央近くに来ている筈であり、帰国は夢ではなく、本当のことだとやっと納得し始めたのである。そのうちに急に放送の声が変わつた。ソ連で共産主義教育で痛めつけられていた我々の仲間がマイクを占領したのである。今までの憤懣を一度に吹き飛ばすように、反共産主義の言葉が立て続けに流れて来たので、我々は放送室の方へ駆け上つて行つた。そして二日目の夜までに

所謂日の丸組が船内の主導権を握つたのである。

二六、舞鶴に上陸

一月二十六日昼過ぎに、船は舞鶴に近付いた。何年も見なかった祖国の樹々、曲線の多い海岸線を目の当たりに見て、皆感極まつて言葉も無かつた。

上陸すると、親切な援護課の職員が、優しく労りの言葉で、キビキビと世話をしてくれた。最初は次々と真裸になって消毒風呂に入ったが、全身をお湯に入れるのは四年半振りであつた。それから新しい下着と服に着替えて、美味しい夕食を頂いた。連絡係の人が、兄と従兄が迎えに来ていると言つて、差入れを届けてくれた。二日間には面会出来ないの、近くの旅館に泊つているとの伝言であつた。やっと生きて日本の土を踏んだという実感がひしひしと胸に迫り、第一夜は殆ど眠ることが出来なかつた。

翌日から二日間は、種々の身体検査と共に、米軍の調査機関の詳細な調べ（ソ連の克明な実情調査）があり、三日目の夜、やっと兄と従兄に合うことが出来た。好きな日本酒と折詰めで生還の祝杯を挙げた。

四日目に帰還列車に乗つて、郷里川崎へ向つたが、異常な興奮と一時的痴呆状態になつていて、途中の駅での歓迎や出迎えて下さつた人達の顔や名前を覚えていないのである。夢にも見た我が家に着いたのは、一月三十日の夕方であつたと記憶しているが、これまた確かでない。

むすび

シベリア約五年間の捕虜生活で、色々な困難と辛苦は数々あつたが、今思い出して最も辛かつたことは、慢性的な飢餓状態であつた。現在の私の体重は八二キロであるが、昭和二十五年に舞鶴に上陸した時は四八キロで、まったく電信柱のようであつ

た。

日本にやっと帰って一カ月程は、毎日三食とも御飯を四、五杯に味噌汁三、四杯と、他の副食を食べていたようで、心肝腎等に、よくも障害が出なかったものだと、空恐ろしい程であった。四十年経った現在でも、食することに對する強迫観念があるようで、食べることでは一般の人より確かに早いようである。

十年以上前から、海外旅行が好きで年に二、三回は各地に出かけて行くが、ソ連へは、なんとなく恐ろしくて、未だに足が向かないのである。ソ連の国民、個人には申し訳ないのだが、これが偽りのない実感なのである。

〈あとがき〉

今から丁度四十年前の、人生最も花やかであるべき青春のとき、生死の間をさまよいながら、四年半に亙るシベリアの補虜生活は、茫洋たる記憶の間にも、脳裡に焼きつけられた鮮明な幾つかの想い出の断片があります。このことは、次第に馬齢を加えて、記憶の減退を感じるようになった昨今になり、ささやかな体験の断片を書き綴りおくことは無駄なことではないと思い、特に軍医の立場から見た捕虜の実情について思い出すままを一筆したものであります。

もともと文才に乏しい凡人の駄文のこと故、読者の失笑を受けることを覚悟の上で敢えて一文を草した次第であります。

(旧陸軍軍医学校二十三期生)

(横浜市保土ヶ谷区岩間町一ノ四ノ二)